古代日本神話に見られる異文化衝突現象分析　その 1
── イザナギとイザナミとの婚姻関係を中心に ──

梁　　継国

はじめに

歴史的に、世界各国、もしくは各民族の文化を縦覧してみて、他国、他民族文化の影響を受けず、他国、他民族文化へも影響を与えずに、独自に誕生、成長、発展してきたものは、見識の浅い自分ではあるが、まだ発見したことはない。グローバル化されつつある現代の世界では、そういうような国、または民族の文化は更に生存の可能性を失くしつつあるであろう。というのは、異なった国、民族の文化の相互影響、融合こそ、文化の成長、発展の要因といえるからである。ところが、一つの国もしくは民族の文化が誕生すると同時に、その生命力、個性、特徴が伴っているものであるため、他の国、他の民族文化からの影響を受け、又は外来文化そのものを受け入れるときには、必ずともいえるぐらい、不調和、または抵抗や、摩擦が起こるのである。この異文化間の衝突により、互いに影響し、相互に融合しあって、民族文化はさらに個性のあるものになり、新しい文化に形成するのである。固有文化を基礎として、中国文化という外来文化を受け入れて、新しく変身し、生まれ変わった日本文化は、その典型的な例だと思う。

今からほぼ1200年も前にできたと言われている古事記がある。古事記といえば、8 世紀にできた漢文体とは言いながら、万葉仮名混じりの、古代日本神話の集大成である。その記述方式から、記述内容に現れている思想まで、中国文化からの影響そのものはもちろん、天皇系を中心とした日本の神話・歴史を記録したものとはいえ、中国文化を受け入れるときの日本人の躊躇、苦痛、抗争の痕跡も随所に見られる。その意味で、中国文化を受け入れて、日本独自の文化形成の経緯を理解し、異文化接触による、文化的摩擦、融合、新生の状況を考察するための最もよいテキストの一つであると思う。

その故に、本論文は、古事記における古代日本神話に関する様々の記述を通して、日本の中国哲学、特に儒教思想に対する受け入れ方を分析して、異文化接触と文化の形成の角度から、外来文化としての中国文化を受け入れる古代日本文化の一側面をシリーズ的に描いてみたい。今回は、イザナギとイザナミとの婚姻関係を中心に考えてみることにする。

1．イザナギとイザナミとの婚姻を扱う理由

古事記は、日本人に広く読まれてきた。古事記に関する研究も、歴史学、言語学、文学、

『人文コミュニケーション学科論集』3, pp.87-101.
© 2007 茨城大学人文学部（人文学部紀要）

民俗学などさまざまな分野に及んでいる。が、物語の内容、粗筋を、一般的な日本人はさりげなく読みとおしてしまい、問題視する人は少ないようである。たとえば、一番ポピュラーで、有名なイザナギとイザナミとの恋愛、結婚、生育に関する創世神話については、みな熟知していて、疑うことがないようである。しかし、イザナギとイザナミが結ばれて、最初に生まれた子はなぜヒルコ（水蛭子）なのであるか? なぜ、イザナギとイザナミはプロポーズをやり直さなければならなかったのであろうか? イザナミが亡くなってから、イザナギが追いかけていって、死んでも一緒にいたいほど、二人が愛し合っていたのに、結局、追い出されてしまい、二人の仲は決裂した。妻のところに行っただけでも、汚れが付いたと思い、徹底的に清めなければならないとしたイザナギであったが、それはまたなぜであろうか?

周知されているように、イザナギとイザナミとは兄妹である。二人が喜んで結ばれたが、最初に出来た子どもはヒルコという奇形児であった。困ったところで、もっと上の神様にその原因を尋ねると、なんとプロポーズの仕方が間違っていたからだと指摘された。やり直したら、今度はうまくいって、たくさんの子供（神様）が生まれ、日本という国作り及び日本人の誕生に辿り着いたのである。このプロポーズの仕方というのは、女から先に男へというのではなく、男から先に女へという順序でなければならないと上の神様に教えられたのである。

しかし、それは、中国古代儒家思想より演繹されて出来た男尊女卑の考え方と一致しているものである。すると、古代日本においては、長く存在し続けていた母系社会による女性地位が高い状況と、取り入れてきた中国哲学（特に儒家思想）にある男尊女卑観念との不調和の存在が明らかだと思われる。結果として、古代日本では、どのようにして、当時の日本社会の状況に基づいて、伝来された中国文化に対して、取捨選択を行い、一連の工夫をして、中国文化を吸収したのであろうか。その過程に発生した不調和をどうやってうまく解消したのであろうか。

このイザナギとイザナミとの婚姻関係をめぐる数々の上記不思議なところについて解明し、中国文化とのかかわりを論じてみようとしたものである。

II．各国、各民族の創世神話兄妹結婚事例

イザナギとイザナミのような兄妹結婚は、世界の創世神話には、珍しい現象ではなく、よく見られるパターンである。聖書に出てくるアダムとイブ、中国古代神話に現れる伏羲と女媧、また、中国雲南地方の少数民族に語り継がれる洪水神話にある人物など、みな同じような兄妹結婚の話である。イザナギとイザナミとの兄妹結婚の話について語る前に、その各国、各民族の創世神話に現れた兄妹結婚の話を先に紹介しておきたいと思う。

1．アダムとイブ

ウイキペデイアフリー百科事典によるとアダムとイブの物語は次のように記載されている。

アダム：「土」「人間」の二つの意味を持つ。イブ：「生きる者」または「生命」。聖書、旧約聖書『創世記』に記されている人間夫婦とされる人物であり、天地創造の一環として、ヤハウェ・エロヒム（日本語訳では主なる神）によって創造されたとされる。アダムの創造後、実のなる植物が創造された。アダムはエデンの園に置かれるが、そこにはあらゆる種類の木があり、その中央には命の木と善悪の知識の木と呼ばれる 2 本の木があった。それらの木はすべて食用に適した実をならせたが、主なる神はアダムに対し、中央の木の実だけは食べてはならないと命令した。その後、女（エヴァ）が創造される。蛇が女に近づき、善悪の知識の木の実を食べるよう唆す。女はその実を食べた後、アダムにもそれを勧め、二人は目が開けて自分達が裸であることに気づき、イチジクの葉で腰を覆ったという。

この結果、蛇は腹這いの生物となり、女は妊娠の苦痛が増し、また、地（アダマ）が呪われることによって、額に汗して働かなければ食料を手に出来ないほど、地の実りが減少することを主なる神は言い渡す。アダムが女をエヴァと名づけたのはその後のことであり、主なる神は命の木の実をも食べることをおそれ、彼らに衣を与えると、二人を園から追放する。命の木を守るため、主なる神はエデンの東にケルビムときらめく剣の炎をおいた。アダムは930歳で死んだとされるが、エヴァの死については記述がない。[①]

食べてはいけないものを食べてしまい、してはいけないことをしてしまうというようなことによって、エデンの園から追放された。性意識の目覚めはしたものの、苦痛、苦労などを人間社会にもたらしたというような結果になったのである。

2．伏羲と女媧

伏羲と女媧とは中国古代神話伝説の中の人物である。兄妹とも言われている。伏羲は兄で、女媧は妹である。唐代李元著、志怪小説集『独異記』には二人の結婚、創世の話が記載されているのである。

伏羲、女媧交尾図[③]

昔、宇宙初開之時、只有伏羲女媧兄妹二人在崑崙山上。而天下未有人民。議以為夫婦、又自羞恥。兄即與其妹上崑崙山、祝曰：「天若遣我兄妹為夫妻而煙悉合、若不使、煙散。」於是煙即合。其妹即来就兄、乃結草為扇以障其面。今時人取婦執扇、象其事也。[②]

大体の意味としては次のようである。

昔々、宇宙の始まりのときには、人間はいなかった。ただ、崑崙山に伏羲と女媧との兄妹しかいなかった。何とかして人を作らなければならないと思って、二人は夫婦になろうと相談した。しかし、兄と妹との関係だから、恥ずかしくてできなかった。そして二人は崑崙山の頂上に上り、天意を問い掛けた。「天（神様）がわれわれに結婚させるならば、その標として、二つの雲を合わせてください。もし　させる意志がなければ、その雲を離すようにしてください。」しかし、雲が直ちに融合した。それで、妹が兄に付いてきて、草を扇子に編んで自分の顔を遮って結婚した。今でも、結婚するときに、扇子を手にしている風習は、そこから始まったのであろう。④

この話について、二点ほど強調したいことがある。まず、兄妹の結婚は非常に恥ずかしいこと。「又自羞恥」はその現れである。無論、近親結婚のことを意識したからであろう。神話伝説というものは当然後世の人間が整理して書き上げたのである。そのため、当然なこととともいえるが、後世の人間の倫理観、道徳意識によって左右される。伏羲と女媧は本当に恥ずかしく思ったかどうか調べるすべがないが、唐代の倫理規範によって、恥ずかしく思わせたのではないかと思う。それから、兄妹の関係であるから、自分では、とてもその結婚を決められないようで、天（神様）の意志を問うのである。つまり、自分の意志では結婚という人生最大のイベントを決められず、神様に決めてもらうことにしたのである。これは中国儒家思想にある「婚姻は天意によるもの」で、自由恋愛は認めない発想に由来するものであろう。

3．中国の少数民族の兄妹結婚事例

中国には56の民族がある。漢民族の上記した伏羲と女媧以外にも、兄妹結婚に関する神話伝説が数多く存在している。特に雲南省にあるナシ族と四川省にある羌族のそれが有名である。

白庚勝著『東巴神話』にはナシ族の兄妹結婚の話が収録されている。それを筆者が要約して日本語に訳しておくことにする。

遠い昔、突然洪水が発生し、家屋が倒壊し、人間が悉く死んだ。兄妹の二人だけが早々山の頂上に辿りついたから、災害から逃れた。二人が山のある洞窟に入った。人類を再生させるため、兄が妹に求婚したが、妹に固く断れた。最後に占いをしたり、神様に聞いたりして、結婚させられたが、奇形児が生まれた。悔しくて99個の塊に切り離して、分解した。山の周りに撒いた。みなそれぞれさまざまの生物に化けた。空にも三粒を吹き上げたが、ひとつは豚、ひとつは羊、もう一つは人間に変わった。⑤

また、羌族の場合は、姉弟結婚の伝説が多い。森林の火事等により、人間が焼死し、幸い生き残った兄と妹が、結婚するというようなものが伝えられているが、洪水災害の話もある。

谷徳明編『中国少数民族神話』に記載されているものを要約して訳して紹介しておこう。

昔々、猿が天にある金の洗面器をひっくり返してしまった。それにより、大雨が降り、洪水が発生した。人々はみんな溺れて亡くなったが、桶の中に隠れている姉と弟だけが生き残った。二人は長くて難しいやり取りを経て、やっと結婚したが、生まれたのは、ただ一つのでっかい肉の塊であった。それを憎んで、二人は細かく切り叩いて木に投げかけた。それがなんと百以上の家族になり、人類が再び繁栄してきた。⑥

この兄妹結婚という記録は、どの国、どの民族の神話にも見られ、ごく一般的なことであり、人類の原始時代段階における近親結婚現象の現われとも言えよう。ただし、上記の諸現象を見てもわかるように、これらの神話に現れてきた兄妹結婚は一つも例外なく、みな非常に悲しいことである。人類の存続、繁栄のため、やむを得ずに二人が困惑と思って、悲しみながら、するものであった。決して喜ばしいこととは思っていなかったようである。また、生まれた子供も近親結婚したため、奇形児が多い。羌族の神話伝説にある「ただ一つのでっかい肉の塊」の表現もその一例である。近親結婚の悔しい気持ちに、子孫繁栄に導くことの出来ない奇形児に対する恨みによって、生まれた子供を殺した上に、遺体を分解したりして処分してしまうケースが多く見られるのである。これも近親結婚ということからの罪意識の現れのではないかと察している。それに対して、日本のイザナギとイザナミの場合は打って変わって、異なった光景を示しているのである。

Ⅲ．イザナギとイザナミの成婚

古事記の記載によると、兄妹であるイザナギとイザナミとの二人の神様は、諸天神の詔を奉り、天から、塩が滴り落ちてできたばかりの、まだ完全には形になっていない島に降臨して、国作りしようとしたのである⑦。繁栄していた人類社会の再生ということでは決してないのである。その国作りは二人の成婚から始まったのである。古事記の原文を引用してその成婚当時の様子を見てみよう。

於是、問其妹伊耶那美命曰、汝身者如何成? 答白、吾身者成成不成合処一処在。尓、伊耶那岐命詔、我身者成成而成餘処一処在。故、以此吾身成餘処、刺塞汝身不成合処而、以生成国土。生奈何、伊耶那美命、答曰、然善。……伊耶那美命先言阿那迩夜志、愛袁登古袁。後、伊耶那岐命言阿那迩夜志、愛袁登売袁。各言竟之後、告其妹曰、女人先言不良。雖然、久美度迩興而成子、水蛭子。此子者入葦船而流去。次、生淡島。是亦不入子之列。於是、二柱神議云、今吾所生之子不良。猶宜白天神之御所、即共参上、請天神之命。尓、天神之命以、布斗麻迩尓、卜相而詔之、因女人先言而不良。亦還降改言。

……於是、御合生子、淡道之穂之狭別島。次、生伊予之二名島[8]。

古事記という書物であるため、基本的に中国古代漢文によってできていることはわかると思うが、若干万葉仮名交じりの部分もあり、分かりづらい部分もある。それを現代日本語に訳すと次のようになるであろう。

イザナギは妹のイザナミに聞いた。「君の体はどうなっているのか。」

イザナミは答えた。「私の体には合わない一ヶ所があるけれど。」

それを聞いて、イザナギは言った。「俺の体には余っているところが一ヶ所ある。それを君の合わない箇所に入れさして、国を作ろうと思うが、如何だろうか。」

「それは宜しいですよ」とイザナミが返事をした。

……

妹のイザナミはまず、兄であるイザナギに言った。「お兄さん、あなたは本当に立派な男よ。」

イザナギも妹のイザナミに「おまえこそ美しい女よ。」と言った。

話し合った後に、イザナギは妹にまた「女の人が先に言うのはあまり良くないようだが。」とは話し掛けたものの、二人は結ばれた。そして生まれたのは、ヒルコで、葦を編んで作った船に入れて、水に流した。その次に淡島が生まれたが、これも子供の列に入らず、処分された。

二人は困り果てて相談した。今まで生まれた子はみな良くないものばかりで、どうすればよいのか、やはり天の神様に教えていただいたほうがよいのではと決めて、ともに参上した。天の神様は占ってから、「やはり女の人が先にプロポーズしたのは良くないことで、もう一回やり直しなさい」と命じた。

……(二人は天の神様の言われたとおりにやり直したら、) 淡道之穂之狭別島と生伊予之二名島とが生まれた。[9]

二人の成婚状況を踏まえて、上記諸神話に現れた兄妹結婚現象と比較して、次のようなことは考えられる。

まず、その結婚の目的が異なる。アダムとイブ、伏羲と女媧は例外であるが、その他に各国、各民族の神話に出てきた兄妹結婚の目的は人類の再生、世界の再建である。つまり、かつては、人類は繁栄していた。世界も栄えていた。地震、洪水などの自然災害により、人類は全滅され、世界も荒涼たる不毛の地になったのである。生き残ったのは兄妹、または姉弟の二人きりである。ただ、この二人によって人類は再び繁殖され、世界も再建されなければならない。つまり、人類の繁栄、世界の再建という重大な任務が二人の肩にかかったのである。ところが、イザナギとイザナミの場合は違う。二人は天から降りてきたばかりである。

人類社会はどんなものであるか、未経験である。中国各民族の神話伝説に現れた兄妹または姉弟の目の前には、少なくても山がある、災害に壊された残骸もあるが、イザナギとイザナミの目の前には、塩が滴り落ちてできたばかりの、まだ完全には形になっていない島しかない。人間ばかりでなく、自然界のすべても二人によって再建するのではなく、最初から作られなければならない。無から有を創造しなければならないのである。

次に、男女意識の問題である。世界各国の神話に出てくる主人公の兄と妹は、本来人間社会に生活していたのである。父親、母親、ほかの兄弟または親戚もいた。男と女との生理構造の相違などについても当然知っているはずであろう。イザナギとイザナミとは天から降りてきた神様である。男女の結合によって生まれたものすらなかろう。しかし男女の姿で現れたものであるため、男女の生理、身体構造の相違に気づき、性意識の目覚めも当然考えられるである。羞恥の観念すらなかったのであろう。

それから、兄妹結婚に対する態度の相違である。先述したようにアダムとイブの場合は、食べてはいけない禁物を食べてしまい、性意識が目覚め、男女として結ばれた。自分の意志によるものではなく、誘惑されたとも言えよう。中国各民族の神話に現れた兄妹結婚の主人公である兄と妹または姉と弟はみな、自分の結婚は嬉しいことではなく、それ以上にない悲しいことだと思われているのである。拒否したり、占ったりして、人類社会の再生という非常に重い使命感に圧迫されて、仕方がなく、泣きながら結ばれるのである。しかし、イザナギとイザナミは悲しいところか、互いにその敬慕の情を表しあって、歓喜のムードが充満している中、求愛し合って結ばれるのである。なぜそんなに違っているのであろうかと考えると、やはり、主人公の生存する環境およびその背景に辿らなければならないと思う。アダムとイブの場合は、性意識の目覚めを通して、個人、自我を主張するヨーロッパ文化の産物であるといえば、中国各民族の場合は、それと異なる。すでに述べたように、人類社会、人類生活はすでに存在していた。突然襲ってきた自然災害によってそれらすべてが失われたのである。生存者としての兄妹にとっては、悲しみ極まりの大惨事であろう。そういうときに、嬉しく求愛することは当然できるはずはなかろう。さらにいえば、中国伝統的な「**男女授受不親**」（男と女は親しく付き合っていけない）という理念に束縛され、男女の結婚は、その二人自身のためではなく、親のため、家族のため、ここでは、人類のため、社会のためまでに広げられたのであろう。日本のイザナギとイザナミはまた、この二つのパターンのどれとも違う。無から有を作るための結び合いである。それ自身が素晴らしいことであり、目出度いことである。彼らにとっては、自分の手によって、今まで一度も現れたことのない、斬新な世界が作られるということは、何よりも喜ばしいことになるであろう。再生ではなく、再建でもなく、根本的意味での創新である。自分の体の生理構造を認識し、性意識が目覚めたことも嬉しいことであるが、斬新な世界を作り出すと言う使命を実感したことの方は更なる喜びになるのではなかろうかと思う。これが各国、各民族の創世神話との最大な違いであると考えられる。

さらに指摘しなければならないのは、プロポーズの方式である。イザナミが先にイザナギに声をかけて、「阿那迩夜志、愛袁登古袁。」（お兄さん、あなたは本当に立派な男よ。）と言って、プロポーズをした。これに対して、イザナギは、「阿那迩夜志、愛袁登売袁」（「おまえこそ美しい女よ。」と答えた。それで愛し合って結ばれたが、生まれたのは奇形児の水蛭子であった。水に流したあと、また、淡島が、生まれたが、それも子供の類に入らなかった。悩んだ挙句、天に行って神様に聞いたら、原因は**「女人先言不良」**で、もう一回やり直せと言う結論であった。天真爛漫で性意識が目覚め、愛し合った二人であるが、何で女の人が先にプロポーズをしていけないのか? 現代社会の若い男女は理解できないだろうと思うが、それはしかし紀元前500年も前からできた中国の儒家思想にある「男は上、女は下。男は先、女は後。男は主、女は次。」というような倫理道徳観念によるものだと指摘したい。それに従わなかったから、うまくいかなかったという結論であるが、あまりにもひどい話である。

しかし、どうして、当時の日本では、このように、中国の昔からの道徳倫理観念が、神様の最高至上の指令にまで扱われたのであろうか。次に、異文化接触と文化の形成の視点から、中国文化を全面的に取り入れる当時の日本社会の文化的背景等を踏まえて論じてみることにする。

Ⅳ．古代日本社会と中国哲学との不調和

日本が本格的に中国文化を取り入れ始めたのは、具体的な記録はまだ発見されていないが、およそ縄文時代の末期であることは定説のようである。この時期の日本は、移動型の狩猟社会から、固定型の農耕社会への過度期に入ったとも言えよう。しかし、この縄文時代の末期にあたる紀元前の200年ごろの中国では、すでに中央集権政治の体制が完成され、数多くの小さな国々に分割されていた中国も初めて秦に統一された。世界でもかなり早く古代専制的王朝が樹立したのである。それは当時の日本にとっては、疑う余地がなく、手本でもあり、憧れの国でもあった。7 世紀、8 世紀の飛鳥、奈良時代になって、やっと日本も中央集権の王朝が築き上げられた。政治的な必要からと言っても、中国文化の受け入れは急務になったのではないかと考えられる。文字や、政治制度、生産技術のような有形的なものはもちろん、教養知識、道徳倫理観念などのような無形のものは国を支配する政権にとってはさらに必要になる。しかし、古代専制的王朝においては、どの国も、どの政権も共通していると思うが、特にイデオロギー的なものが政治と一旦関係すれば、その国、その民族の慣習、伝統と合うか合わないかにもかかわらずに、絶対的なものになるのである。いかなる反対または抵抗の勢力があろうにもかかわらず、政治的に必要だと判断されたら、すべての反対と抵抗を押し切って、容赦なく受け入れるに違いない。それによって、外来文化を取り入れる際に、当然と言ってよいぐらいに、不調和音が出てくる。イザナギとイザナミとの兄妹結婚の話はまさ

かその典型的な一例になると思う。

まず、イザナギとイザナミの結婚の話から見れば、当時の日本は、儒家思想を代表とする中国の哲学、道徳倫理観念にまだ完全には束縛されていなかったようである。それどころか、当時の日本人はむしろ、非常に情熱奔放で、ロマンチックな性格を有するのではないかと思われる。プロポーズと言えば、男からであろう、女からであろう、誰が先にするかは、決まりがなく、どっちから先にしても別にかまわない。特に、母系社会の歴史は中国より日本の方がずっと長い。古事記から見ても、その痕跡が散在している。家庭的でも、社会的でも、主導的、リーダー的な立場に立っているのが女性である。そのように家庭的でも、社会的でも地位の高い女性からプロポーズするのは、ごく当たり前のことであり、特に気にすべきものではない。故に、イザナミがさり気なく、自分の気持ちを如実に表したのである。しかし、イザナギは、プロポーズされた後、一言呟いた。**「女人先言不良」**である。後の「神様」の結論と一致しているのである。これは非常に大事なことである。ある意味で、二人の最初の結婚が失敗するのを暗示したとも言えよう。さらにいえば、男性優位の男権社会の出現する前の過度期に、イザナギは男性としてすでに中国文化、中国の道徳倫理理念に魅せられたのではないかとも考えられる。つまり、後には、家庭的にも、社会的にも絶対的な支配権、主導権を握るようになる男性は、男尊女卑、男性優位を代表とした中国の道徳倫理理念に当然憧れを感じ始め、その導入に積極的な態度をもったである。しかし、これに対して、イザナミは何も言わなかった。後で、「神様」のところに行って、やり直せと命じられても、文句一つは言わなかったのである。そしてまた楽しく男性を先に立てて、やり直した。結果としてうまく行ったが、内心としては、100％自分の間違いを認め、中国的な道徳倫理観念に完全に服従したのであろうか? 筆者としては、そうは思わない。二人の結婚生活の進展状況を見るとそのことが分かる。

次生火之夜芸速男神、亦名謂火之炫毘古神、亦名謂火之迦具土神。因生此子、美蕃登見炙而病臥在。故、伊耶那美神者、因生火神、遂神避坐也。……故尓伊耶那岐命詔之、愛我那迩妹命乎、謂易乎之一木乎、乃匍匐御枕方、匍匐足方而哭……其所神避之伊耶那美神者、葬出雲国與伯伎国堺比婆之山也。於是、伊耶那岐命、抜所御佩之十拳剣、斬其子迦具土神之頸……⑩

於是、欲相見其妹伊耶那美命、追往黄泉国。尓、自殿滕戸出向之時、伊耶那岐命語詔之、愛我那迩妹命、吾與汝所作之国、未作竟。故可還。尓、伊耶那美命答白、悔哉、不速来。吾者為黄泉戸喫。然、愛我那勢命、入来坐之事、恐。故、欲還且与黄泉神相論。莫視我。如此白而、還入其殿内之間、甚久難待。……入見之時、宇士多加礼許呂呂岐弖、於頭者大雷居、於腹者黒雷居、於陰者析雷居、於左手者若雷居、於右手者土雷居、於左足者鳴雷居、於右足者伏雷居、併八雷神成居。於是、伊耶那岐命見畏而、逃還之時、其妹伊耶那美命言令見辱吾、即遣予母都志許売、令追。尓、伊耶那岐命取黒御鬘投乃、生

蒲子。是遮食之間、逃行。猶追。……最後、其妹伊耶那美命身自追来焉。……伊耶那美命言、愛我那勢命、為如此者、汝国之人草、一日絞殺千頭。尓、伊耶那岐命詔、愛我那迩妹命、汝為然者、吾一日立千五百産屋、是以一日必千人死、一日必千五百人生也。故、号其伊耶那美神命、謂黄泉津大神。⑪

以上は、イザナギとイザナミとの結婚した後の二つの記載内容である。前のほうは、イザナミが火の神様になった子供を生み、難産により、世を去った話であるが、後ろのほうは、黄泉の国に行ったイザナミに是非合いたいと思って、その後を追いかけたイザナギであるが、最終的に激しい喧嘩をして永遠に別れた話である。大体の意味を現代語に訳すと、次のようである。

次に生まれたのは火之夜芸速男神で、その名前はまた火之炫毘古神、火之迦具土神ともいう。この子を産んだことにより、イザナミの陰部が焼かれ、倒れた。しばらくして亡くなられた。……イザナギは悲しみのあまり、大泣きしながら、イザナミの横になっている枕もと、足元を這いばって、「あなたの命は、こいつのために替えられたのだろうか!」と泣き喚いていた。……亡くなったイザナミは出雲国と伯伎国の堺にあるヒバの山に葬られた。イザナギは、持っている剣を抜き出して、その子供迦具土神の首を思い切って切り落とした。……

イザナギは亡くなった妻のイザナミに会いたいため、黄泉の国に追いかけた。その入口のところで、大きな声で叫んだ。「愛している我妻よ、われわれの国作りはまだ終わっていないから、是非帰ってきて一緒に作りつづけよう。」しかし、イザナミが答えた。「悔しいわ。もっと早く来てくれれば良かったのに。黄泉の国に一旦入ったらもう出られないのよ。だから、愛しているわが夫よ、絶対入ってはいけない。待っていてください。黄泉の神様と相談するから。その間に私の姿を見てはだめよ。」それで奥のほうに入っていったが、イザナギは待ちきれずに、つい入ってしまった。目に入ったのは、なんと、8人の雷の神様がイザナミの体にのっかけているのではないか。イザナギは大いにびっくりして、慌てて逃げ出した。その時、イザナミが荒い声で話した。「あなたが見てはいけないことを見てしまって、私を侮辱したのだ。」と。そして黄泉の国の醜い女の鬼たちを使って、追いかけた。イザナギは黒い鬘を投げ捨て、その鬘は葡萄に化けた。鬼たちがそれを食べている間に、イザナギはまた逃げた。……最後に、イザナミが自ら追いかけてきた。……イザナミが言った。「愛しい夫よ、あなたがそんなことをするのならば、あなたの国の人々を、一日に千人を殺してしまおう」と脅かした。しかし、イザナギが少しも怖がらずに「そんなことをしたら、私は一日に千五百人の赤ちゃんを産むぞ。」と言ってきっぱりと分かれた。その故か、イザナミを黄泉津大神と号した。

まず、イザナギとイザナミの愛情について語ってみたい。イザナミが火の神様という子供を産んで、陰部に火傷をした。今風に言うと難産であろうと思うが、世を去った。中国的な考え方だと、「**不孝有三、無後為大**」（親不孝はいろいろあるが、子孫を残さないことは最大の親不孝である）⑫ と伝統的に思われている。この考え方は、今でも変わっていないようだ。例えば、今の中国で、奥さんがお産のため、入院したとする。難産の場合、医者から子供と親とのどっちを優先的にとるかと告知されたら、子供を選ぶ人が圧倒的に多いと思う。つまり、中国人のその観念から言うと、配偶者としての妻は世の中の女性からいくらでも選べるが、自分の血筋を引いていて、将来後継ぎになる子供は、誰でもよいというように選べるものではないからである。あまりにもひどい話ではあるが、男尊女卑の考え方が一般的に認められている中国社会では、極当たり前のような現実そのものであり、特に贅言する必要はない。しかし、イザナギの場合は、そういうような中国的な理念ややり方とは全く異なった信条に従い、まったく異なった行動をとったのである。まず、中国では考えられないぐらいに悲しんだ。愛している妻に死なれたら、深い悲しみに陥ってしまうのはどこでも同じように考えられるが、イザナギみたいに、奥さんの枕もと、足元をぐるぐる這いばって、大声を出して慟哭することは、自分の人生経験がまだ浅いせいか、中国では、今まで聞いたことも、見たこともない。妻のイザナミが難産のため亡くなったのであるが、イザナギから見れば、妻が亡くなったのは完全にその子供のためであると考えているのである。この子を産まなければ、妻は元気でいられるし、愛情の溢れているような素晴らしい夫婦生活が送れたのであろう。この子のために妻が死んだ。そして妻への愛情は、生まれた子供への恨み、憎しみに変わったのである。さらにびっくりしたのは、その強い憎しみのあまり、「**抜所御佩之十拳剣、斬其子迦具土神之頸**」子供を殺したのである。イザナギが自分の子供を殺してしまうほどイザナミのことを愛しているとは、中国人としての筆者は思いもよらなかったのである。しかし、それは、単なる愛情が深いというより、古代の日本民族においては、愛情至上の理念が一般的だったのではないかと私は思いたい。子供まで殺してしまうほど愛情至上の国は、当然中国の堅苦しい男尊女卑の道徳理念とは合うはずがなかろう。しかし、中国文化を全面的に受け入れるという大きな時代的背景の元に、「**女人先言不良**。」とは呟きながら、いざ、愛している妻が亡くなったという現実的、且つ痛切なことに遭遇すると、もうすべてその堅苦しい「衣」を脱ぎ捨て、民族固有の文化本来の姿を現したのである。別にこれは中国文化という外来文化に対する反抗とはいえないが、中国文化、中国哲学に含まれている道徳倫理観と日本固有文化の特徴との不調和ではないか思われる。論理的に当時では先進的な中国文化を取り入れようと思っていても、根底に存在する日本人固有の性格、慣習、更に言えば、個性的な日本文化が根強いものであった。

Ⅴ．苦痛と反抗が伴う外来文化の受け入れ

上記のような不調和と同時に、外来文化を受け入れるときに、必ずともいえるぐらいに、苦痛と反抗も伴うものである。今度は、黄泉の国行ったイザナミと後を追いかけてきたイザナギとのやり取りを通して考えて見たいと思う。

イザナミが亡くなり、黄泉の国に行ったが、妻に死なれて、悲しみのあまり、イザナギが極端的な行動をとる。つまり、黄泉の国に行って、イザナミを呼び戻そうとしたのである。子供を殺したのは、もう中国の倫理道徳観からいえば、考えられないことであるが、それより、黄泉の国から妻を呼び戻すというのは更なる無謀なことだと思われるのである。しかし、イザナギはしたのである。当然実現できるはずはない。ここで注目されたいのは、イザナミの取った行動である。まず、イザナギと会わないことである。まったく異なる世界であるため、一旦入ったら、もう出られないし、夫を中に入れたら、その夫も黄泉の国のものになってしまう。そのため、一生懸命夫との面会を断った。そこから、夫への愛は相変わらずに存在していると思われる。また、二人の呼び合いから見ても、新婚当時とはまったく変わらないことも分かると思う。ところが、イザナギは外で待たされて、待ちきれずに、許可なしに入っていたら、なんと、雷の神がイザナミの体の上にのっかっているのではないか。この光景を目にしたイザナギは、一瞬、裏切られたと思うのも当然であろう。自分の窘態が見られたイザナミは、この上なく怒り果てた。部下の「予母都志許売」を派遣し、追いかけた。イザナギを捕まえられなかったため、イザナミは、今度は自ら追いかけた。そしてイザナギを脅かした。二度とそんなことをしたら、あなたの国（黄泉の国と区切られている人間社会を指すか）の人を一日千人殺すと。これに対して、イザナギは、もしそんなことをしたら、私は一日に千五百人を生み出すよと、二人は完全に対立し、憎しみあうようになったのである。死ぬほど愛し合っていた二人であったが、両立できない敵同士になってしまったのである。その原因は、一体どう考えればよいのであろうか。

一言で言えば、愛情の破滅である。表面では、二人の呼び合いは、まだ「愛我那勢命」（愛しているわが夫）と「愛我那迩妹命」（愛している我妻）にはなっているが、黄泉の国に行ったイザナミは、雷神と一緒になった。生前とはまったく別の異なった世界であるから、当然であるといえるかもしれない。生前では、「**女人先言不良**」と言われ、束縛されたが、黙っていた。我慢していたとも言えよう。ところが、黄泉の国という別の世界に行ってから、やっと自由になり、情熱奔放な性格を如実に表すことができるようになったのである。どうせ、世界は別であるから、何をしても、自由だと思われたのであろう。ただし、夫のイザナギを追いかけて殺そうとして、少しも容赦する気がなかったことは、やりすぎではないかとも思われる。また、二人は、国づくりのため、力を合わせて、一生懸命努力してきた。その自分の手で作り上げた国の人間を一日に千人も殺すというのも、度を超えているのではないかと

言いたい。この上ないほど愛し合った夫婦だったのに、死ぬことによって、容認できない敵同士になったというようなことは、われわれ普通の人間から見れば、どうも不自然と言うより、あまりにも唐突に思われる。しかし、古事記の原作者の意志によるものであるかどうかはわからないが、もしそうだとすれば、わざとそういうような表現をしたのではないかと考えられる。つまり、そういうような形で、取り入れた外来文化としての中国文化に対する反抗を表現したかったのではないかと察している。今までの母系社会と違い、男性中心の中央集権国家の社会を創ろうとして、男尊女卑、男性優先を唱える儒家思想を代表とした中国文化を受け入れたため、固有の日本文化との間に衝突、摩擦が起こったとしても、余りにも強力の中国文化、それを全力推進で取り入れようとする国家権力に対抗することは出来ない。その中国文化を受け入れる過程に生じた躊躇、苦痛、抗争は、どうやって表現すればよいのかといえば、黄泉の国という別の世界を背景にしてやるしかないのではないかと思われるが、そこにすこぶる哀愁を感じずにはいられない。

また、イザナギの取った行動をも見てみたい。子供を殺してしまうまで、妻のイザナミを愛していたイザナギではあるが、イザナミからの許可なしに、黄泉の国に入って、イザナミの、人に見せたくない格好を見ただけで、追いかけられて、殺されそうになる。また、同じようなことを繰り返せば、自分の国の人が一日に千人も殺されるとイザナミに言い渡された。これには、さすがのイザナギも、怒らずにはいられなかった。自分を裏切って、他の者と一緒になっただけでなく、自分の国の人を一日に千人も殺すという元妻は、許すところか、敵同士としか考えられないであろう。もし自分の国の人が一日に千人も殺されたら、一日に千五百人も生み出すと言って、自分の世界に戻った。イザナミとの決別を決心しただけでなく、絶対相手に勝つのだという気持ちとしても理解される。それだけに止まることではなかった。イザナミと別れて、黄泉の国から帰ってきたイザナギが何よりも真っ先にしなければならなかったのは、穢れを落とすことである。

> 是以伊耶那岐大神詔、吾者到於伊那志許米志許米岐穢国而在祁理。故、吾者為御身之禊而。到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐。原而禊祓也。……[13]

大体の意味は次のようである。

> それでイザナギは言った。「私は、非常に恐ろしいほど穢れた国に行ってきたので、私はこの穢れた体をきれいに清めようとするぞ。」そう言って、イザナギは、筑紫の日向国の橘の海の入り口に来て、裸になって、海水で体を清めた。

その穢れを落とす行為は、イザナミとの徹底的な決別を象徴していると思う。亡くなった妻のイザナミと会い、呼び戻そうとしたときのイザナギは、前に引用した内容から見ても分

かるように、イザナミが穢れ的な存在であるとは絶対思っていなかったのである。他の者と一緒になったり、自分の国の人を殺そうとしたりするイザナミの豹変に直面し、さんざん嫌な思い出をさせられた後、それが原因で、イザナギの考えが一変し、イザナミを見ただけでも、穢れが付いたと思うようになり、徹底的にそれを払い落とし、その縁をきっぱりと切ろうとしたのである。それによって、イザナミとの決別をすると同時に、「**女人先言不良**」と呟き、中国文化的素質を暗示的に持つイザナギの姿がもっと鮮明になり、後の配偶者不在の状況で、国創りのために奮闘する記述のためにも、しっかりした基礎を築き上げたであろう。角度を変えていえば、躊躇、苦痛、抗争が伴っているとはいえ、中国文化の全面的な取り入れに更に拍車を掛けたとも理解される。当時の中国文化導入賛成派の躊躇から決心への心理的軌跡が描かれているのであろう。

Ⅵ．終わりに

以上のように、異文化接触と文化の形成の角度から、古事記に記載されている古代日本神話にある非常にポピュラーな話、イザナギとイザナミの恋愛・結婚、そして死別・永遠な別れのいきさつを考察してきた。外来文化としての中国文化を受け入れる過程における日本固有文化、古い慣習、理念等の矛盾、摩擦を分析してきた。その中に、不調和音、躊躇、苦痛、抗争があったとはいえ、最終的には、結果として、イザナギがイザナミと徹底的に縁を切ったことによって象徴されているように、外来文化導入主張派の更なる決心により、外来的なものとしての中国文化は日本文化に受容された。それによって日本の伝統文化も新しい要素を吸収して、新たな発展の一歩を踏み出したのである。

とは言いながら、自由奔放で、愛情至上、そして、母系社会の歴史の長い日本にとっては、「仁、義、礼、智、信」を主張し、男尊女卑、女性蔑視などの硬い観念を中心とし、人間性を束縛して、国民を支配して国を治めることを目的とした中国の文化、中国の倫理道徳観、中国の哲学は、余りにも異質で許容しがたいものであった。当時の歴史・社会の背景から見ても、まったく違和感がなく、少しも反抗せずに、無条件に受け入れられるというようなことは、まず考えられない。

註

① ウイキペデイア　フリー百科事典　http://ja.wikipedia.org/wiki 2007年 1 月 4 日取得
② 唐李元著『独異記』 中華書局　1983年出版　p58　太字は筆者。以下同様。
③ 中国・淮陽　http://www.huaiyang.gov.cn/news/view.asp?id=1024　2007年 1 月25日取得
④ 訳文は筆者による。以下同様。
⑤ 白庚勝著『東巴神話』 社会科学出版社　2002年　p145
⑥ 谷徳明編『中国少数民族神話』（上）中国民間文芸出版社　1987年　p267～268
⑦ 倉野憲司　武田祐吉校注『日本古典文学大系 1 古事記祝詞』p52　岩波書店　昭和33年6月5日
⑧ 青木和夫等校註「日本思想大系 1　古事記」岩波書店　1989年 7 月14日　第 8 刷発行 p20～22　太字をした部分は筆者による。以下同様。
⑨ 訳文は筆者によるもの。以下同様。
⑩ 上掲『日本思想大系 1 古事記』p30～32
⑪ 上掲『日本思想大系 1 古事記』p32～36
⑫ 漢語大辞典出版社編『漢語大辞典』巻 1　P411　孔子『四書』より引用　1990年
⑬ 上掲『日本思想大系 1 古事記』p36